馬探２０２３　応募作品

学生の声から考える「馬の今と未来」

～都内獣医大学での調査結果と馬の学習機会の考察～

日本獣医生命科学大学

獣医学部 獣医学科　6 年

宮本 汐里

1. 背景と目的

著者は都内の私立獣医大学である日本獣医生命科学大学（以下、日獣大）の獣医学生として過ごす中で、馬に関する進路を考える知人が非常に少ないこと、そして獣医学教育カリキュラムの馬に関する学習機会の不足を感じ、学習機会と希望進路の関連性に興味を持った。また、馬に関心がありながらも、学習機会の不足等を理由に、馬に関する進路を選択しない学生がいるのではないかと考えた。

そこで、獣医学科、獣医保健看護学科、食品科学科、動物科学科を持ち、動物に関する学科を広く備える日獣大で、学生の馬への興味や馬関連の就職意思、学生自身が馬に関して課題と感じる事柄について調べ、学生の馬への意識を明らかにすることで、馬に関する課題とその解決策を考察することを目的とした。

2. 方法

日獣大の全学科全学年（獣医学科１～６年、獣医保健看護学科１～４年、食品科学科１～４年、動物科学科１～４年）のグループ SNS に、Google Form にて著者が作成したアンケート「関心のある動物に関する調査」を送信し、回答を集めた。調査期間（アンケートフォームの開放期間）は 2023 年 6 月 23 日～8 月 23 日の 2 か月間とした。

なお、学科の表現については学問分野をとらえやすくするため、以降は獣医学科を「獣医系」、獣医保健看護学科を「動物看護系」、食品科学科を「食品系」、動物科学科を「畜産系」と表記する。

3. 結果

集計した回答は全 171 件であった。

以降の円グラフ内に記された数値は、すべて「回答数 , 割合(%)」を示す。

3.1　回答者の属性

回答者の学年、学科はそれぞれ図 1、図 2 のとおりであった。

学年別では 1 年生の回答者が最も多かった。学科別では、獣医系・動物看護系・畜産系がおよそ 30%ずつを占め、食品系で最も回答が少なかった。

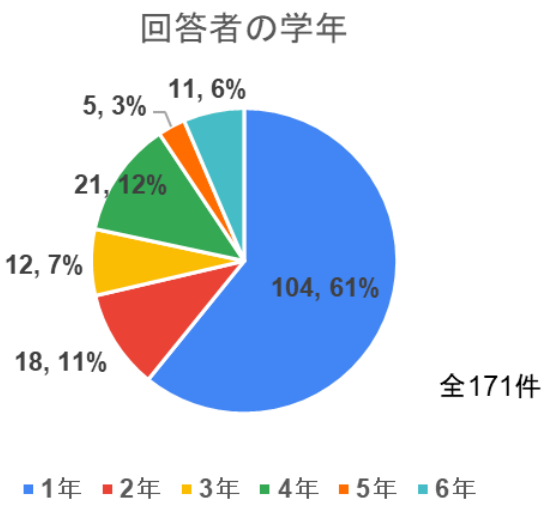

図 1

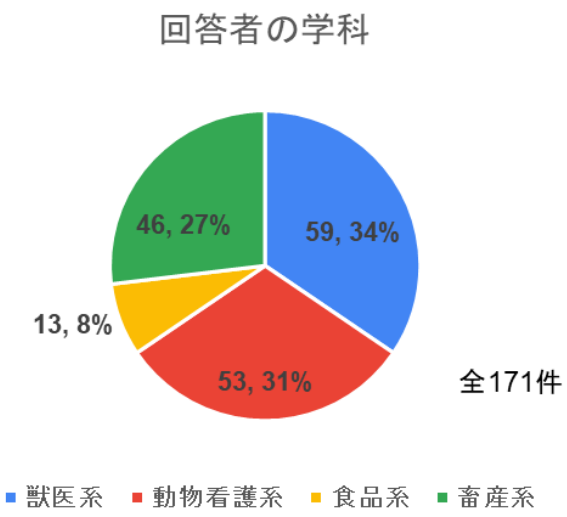

図 2

3.2　馬への関心

馬を含め獣医学の教育カリキュラムで主に扱う動物 6 種および「その他」を選択肢として、最も関心のある動物を尋ねたところ、15%が「馬」と回答した（図 3)。また、馬に関心があるかどうかを尋ねたところ、71%が「馬に関心がある」と回答した(図 4)。また、馬に最も関心があると回答した学生は、畜産系で 44%と最も多い結果となった(図 5)。

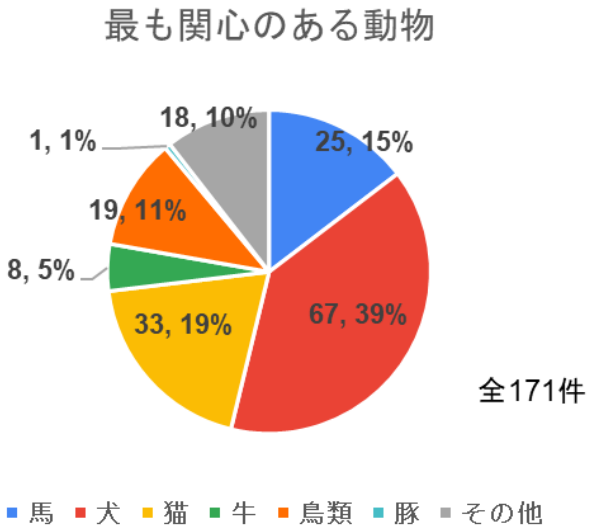

図 3

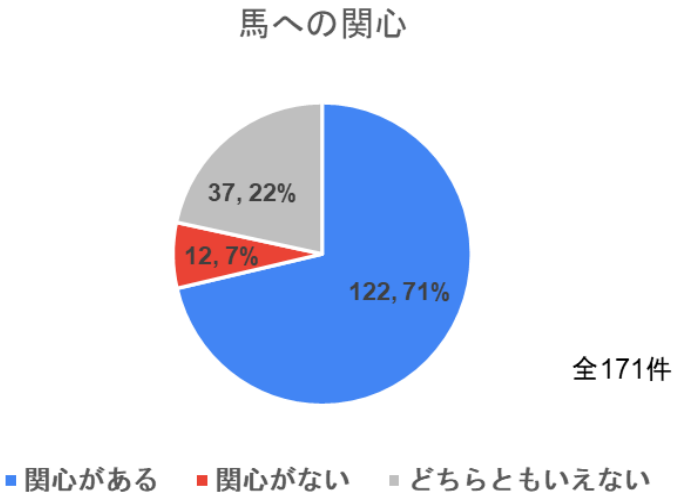

図 4

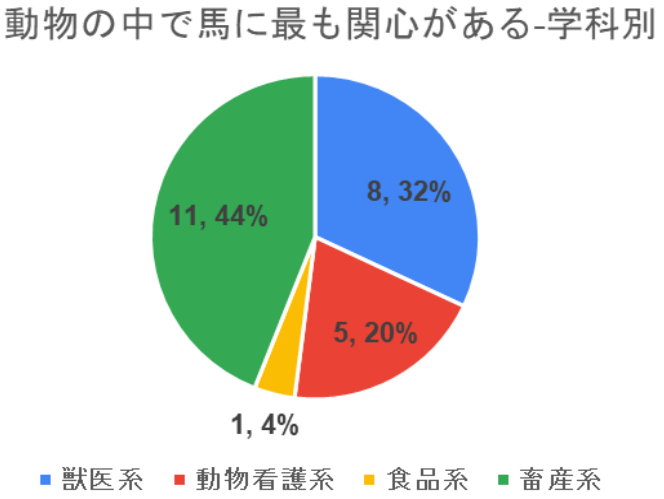

図 5

3.3　馬に関心を持った時期

図 4 の質問で、馬に「関心がある」と回答した 122 人に、馬に関心を持った時期を尋ねたところ、74%が「大学入学前」と回答した（図 6）。これは、学科別に解析した場合でも同様の傾向を示した。

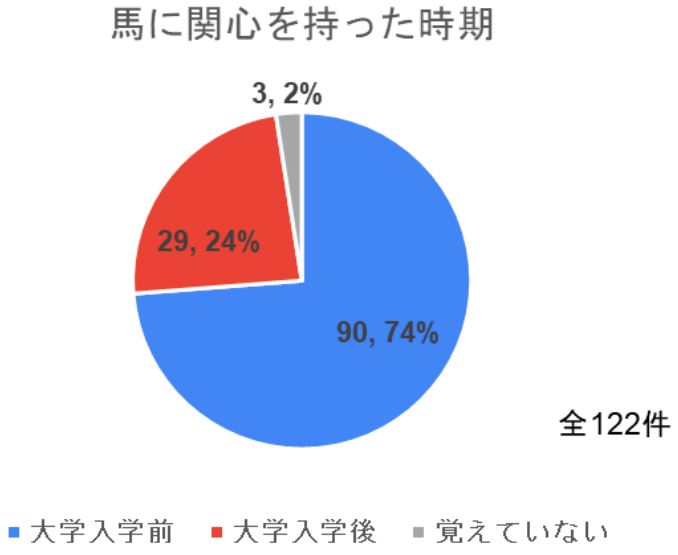

図 6

3.4　馬に関心を持った契機

図 4 の質問で、馬に「関心がある」と回答した 122 人に、馬に関心を持った契機を尋ねたところ、図 7 の結果となった。「自身の出自から」の項目は、実家の近くや学校に馬がいた、友人・知人が馬関連の仕事をしている等の回答をまとめて表した。「その他」には、本や SNS、種類に依らず動物全般が好きといった回答が含まれた。

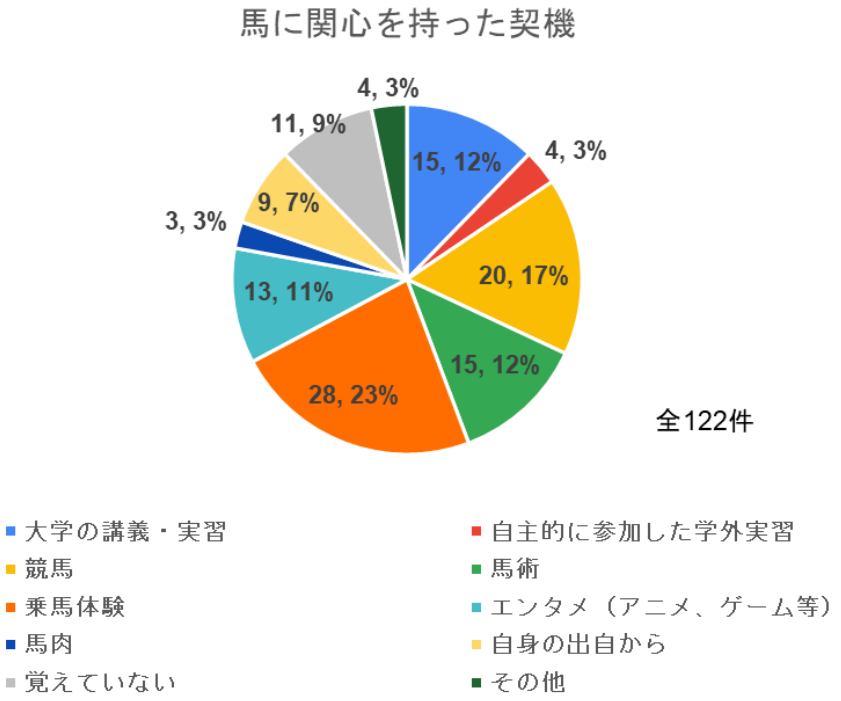

図 7

3.5　馬に関する進路

図 4 の質問で、馬に「関心がある」と回答した 122 人に、馬に関する進路を考えているかを尋ねたところ、「積極的に考えている」は 10%、「就職意思はあるが、何らかの理由で積極的に考えていない」が 25%となった(図 8)。これは、学科別に解析した場合でも同様の傾向を示した。

さらに、「就職意思はあるが、何らかの理由で積極的に考えていない」と回答した 30 人に理由を尋ねたところ、「学習機会の少なさによる不安」が 30%、「職業の選択肢の少なさ」が 30%を占めた。「その他」には、採用倍率など就職試験の難易度が高い、参入したい分野のロールモデルが周りにいないといった回答が含まれた。(図 9)

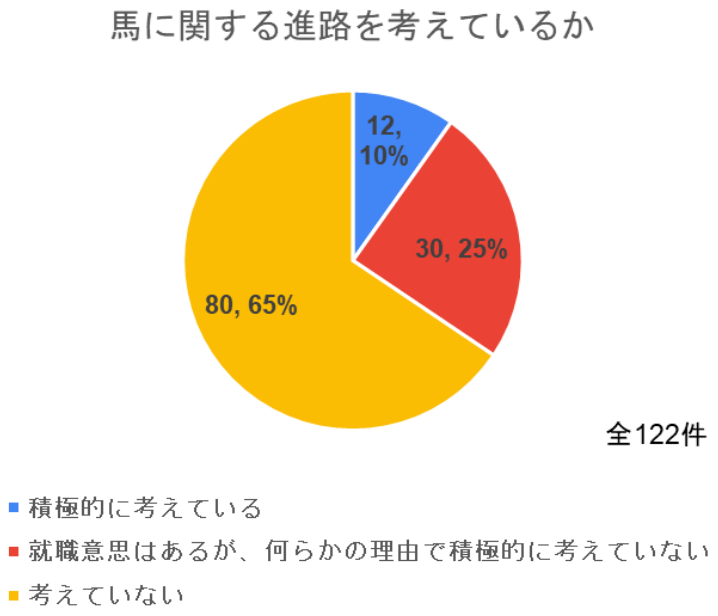

図 8

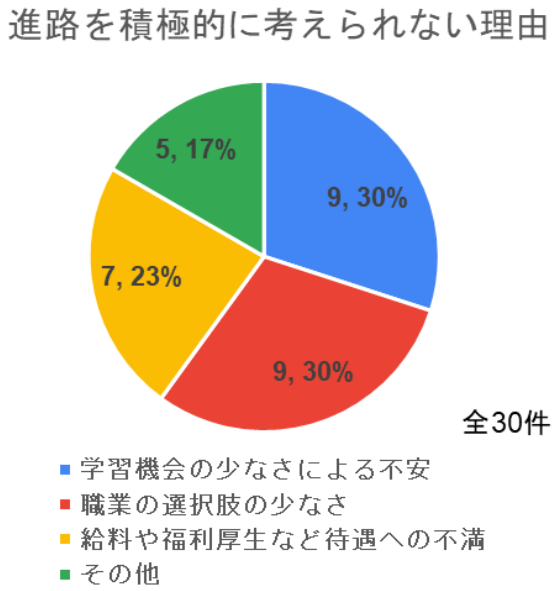

図 9

3.6　馬について課題に感じる事柄

現状の馬について課題に感じる事柄がある場合、任意での回答を求めたところ、回答の 66%が「馬のアニマルウェルフェア」に関する事柄を課題として回答した。具体的には、引退馬のセカンドキャリアや養老牧場の充実、競走馬の安楽殺、上げ馬神事に関する見解などが含まれた。また、この質問においても 17%が「学習機会の少なさ」を課題として指摘した。具体的には、馬の講義が少ない、実物の馬と触れ合える実習が少ない、大学に馬専門の教員がいないなどの意見があった。(図 10)

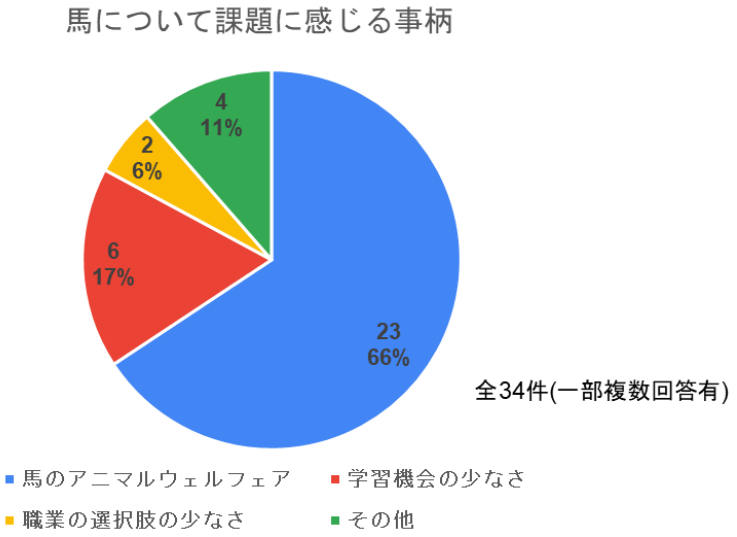

図 10

4.　考察

4.1　生活の中の馬

図 7 では、「競馬」「馬術」「乗馬体験」の 3 項目が合計で全体の 52%を占めており、これは学科別に解析した場合でも同様の傾向を示していた。上記の 3 項目は、娯楽やふれあい体験、部活等、日常生活でなじみの深い体験に基づくものであり、図 6 で 70%以上が「大学入学前」にすでに馬に関心を持っていたと回答していることからも、人間と関わる動物として、馬はとくに大きな影響を持つと考えられる。これは、図 3「最も関心のある動物」で、馬と同様に一般に大動物や畜産動物として分類される牛(5%)・豚(1%)への関心と比較して、馬への関心が 15%と大きいことからも考えられる。

4.2　仕事として馬に関わることへの不安

4.1 で述べたように学生の馬への関心は大きいものの、馬に関する進路を決めることには積極的でない学生が多いようだ。図 8「馬に関する進路を考えているか」の結果では、「積極的に考えている」は 10%(12 人)、「就職意思はあるが、何らかの理由で積極的に考えていない」は 25%(30 人)、「考えていない」は 65%となった。「積極的に考えている」と「就職意思はあるが、何らかの理由で積極的に考えていない」を合計した 42 人のうち 30 人、つまり就職意思のある学生のおよそ 10 人に 7 人は理由があって積極的になれない現状がある。今回の結果では、その理由のうち 30%を占めたのが馬に関する「学習機会の少なさによる不安」であった(図 9)。学習機会の少なさは、図 10「馬について課題に感じる事柄」においても意見がみられたことから、馬を学ぼうとする学生がより多くの学習機会を望んでいることが伺えた。

4.3　「課題に感じる事柄」からみえてくる可能性

図 10「馬について課題に感じる事柄」では、「馬のアニマルウェルフェア」に関する回答が最も多く見られた。著者はこの課題に向き合うことこそが、現状の馬に関する学習機会の不足や、図 9 で学習機会の不足と同様に嘆かれている「職業の選択肢の少なさ」の解決の糸口となるのではないかと考えている。

現在、世界中でアニマルウェルフェアの意識が高まっている。わが国においても、2022 年 4 月に経済産業省が日本経済の課題としてアニマルウェルフェアを取り上げ、その重要性を認めた[1]。今後、国内でますますアニマルウェルフェ

アの意識が高まるにつれ、図 10 の調査で挙げられた引退馬や安楽殺、神事の取り扱いが見直しされ変容していく可能性がある。以下で、とくに引退馬についてとりあげ、社会の中での引退馬の扱いの変化が、いかにして学生の感じる「学習機会の不足」や「職業選択肢の少なさ」を解決しうるものになるかを考察する。

4.3.1　養老牧場と馬の老年医学

近年、引退馬が余生を過ごす養老牧場が各地で設置されつつある。今後アニマルウェルフェアの高まりとともに、全国各地で同様の養老牧場が増設されていくとすると、牧場の農業従事者やハンドラー、獣医診療など、仕事で馬に関わる機会が増えると考えられる。

さらに、養老牧場が増え、高齢まで生きる馬が増えると、馬の老年医学の知見が必要とされるようになる。馬の老年医学はわが国であまり研究がなされておらず、今後新たな研究フィールドとして開かれていくと考えられる。また、養老牧場が充実した未来において、馬はイヌネコと同様にコンパニオンアニマルとしての側面を持つと考えられる。そうすれば、馬に関する教育の重要性が見直され、学生により多くの学習機会が提供されるようになると考えられる。

4.3.2　引退馬とともにある人間社会のすがた

アニマルウェルフェアの観点で非常に魅力的な養老牧場だが、馬の飼育費等高額な維持費が必要となる。そのため、Yogibo ヴェルサイユリゾートファームが行っているような、競走馬のタレント性を活かした宣伝や Yogibo 製品と馬とのコラボグッズ販売など、経営に工夫が必要になる[2]。

そこで、引退馬が役割を持ち、より人間社会に受け入れられやすくなる可能性を考えた。一つ目がホースセラピー（馬介在療法）への活用である。ホースセラピーは身体にも精神にも良い影響をもたらすことが分かっている[3]。引退馬は若い馬よりも攻撃性が低く、人慣れしているため、介在療法に適していると考えられる。次に、馬耕への活用である。馬耕とは、トラクターが入りにくい場所において馬に農具を引いてもらうことで土地を耕したり、除草を行うことである。過去には、実際に引退した馬がブドウ園の除草作業を行った事例が報告されている[4]。また、現在日本では耕作放棄地が増加しており、病害虫・鳥獣被害の発生、雑草の繁茂、用排水施設の管理への支障など様々な悪影響が心配される[5]。引退馬による馬耕が普及すれば、耕作放棄地の解決策の

一つになると考えられる。そして、実習馬としての大学や研究機関付属牧場でのニーズが高まることも考えられる。

6　結語

学習機会の少なさを理由に馬の進路を積極的に考えることできない学生がいるという調査結果は、当初の著者の感触通りであった。しかし、馬に関心を持つ学生の多さ、馬についての課題としてアニマルウェルフェアに関する事柄が目立っていたことは新たな発見であり、それらの結果を通して、今後の馬に関する職業や学習機会、引退馬の扱いについて考察を深めることができた。

考察 4.3 では、人間社会の中に馬の居場所を作ることで、アニマルウェルフェア問題の解決とともに、学習機会や仕事など馬に関わることのできる場面が増えていくと記した。人間はこれまで、種独自の社会を作ることで自身の群れを守ってきた。しかし今一度、私たちは一つの地球の上で他の動物と影響しあい共存している事実を認識しなおす必要があるのかもしれない。

また、今回は用意された大学のカリキュラム内の「学習機会の不足」という点に目を向け、改善に向けての考察を行ったが、現在与えられる学習機会に不満を持つ学生には、ぜひ自ら具体的なアクションを共に起こしてほしいと思う。著者は大学であまり学ぶことのできなかった馬について理解を深めるため、馬探 2023 への応募を決めた。図 7「馬に関心を持った契機」の結果においても、わずかながら「自主的に学外実習に参加」した学生が存在する。一人でも多くの馬への愛を持つ者が、現状を変えたいという意思を持って行動することで、馬の世界を広げることにつながるのではないだろうか。

参考文献

1. 第 208 回国会 参議院 経済産業委員会(2022), 「第 5 号 令和 4 年 4 月 7 日」
2. 引退馬牧場 Yogibo ヴェルサイユリゾートファーム HP, URL: 引退馬牧場 Yogibo ヴェルサイユリゾートファーム | 北海道（versailles-resort.com） （最終閲覧日:2023 年 10 月 31 日）
3. 局博一(2013)「馬介在療法の健康効果に関するオーバービュー」, 東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター生体影響評価研究室
4. NHK, 『歌志内 ブドウ園の除草作業に引退したばん馬』, 北海道 NEWS WEB , URL:https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20230715/7000059221.html （最終閲覧日：2023 年 10 月 31 日）
5. 千葉県 (2022), 『耕作放棄地とは』, URL: https://www.pref.chiba.lg.jp/noushin/kousakuhouki/what.html （最終閲覧日：2023 年 10 月 31 日）

謝辞

アンケート調査にご協力くださった、日本獣医生命科学大学の皆さまに厚く感謝致します。
そして、このような貴重な機会をくださった、十和田流鏑馬観光連盟の皆さまに心より感謝致します。